

# テラヘルツテクノロジーフォーラム通信

Vol.5, No.2 (2007 年度)

## 「テラヘルツテクノロジーフォーラム 5周年を迎えて」

本フォーラムが2003年の10月1日に発足して早くも5年目に入っている。この5年間に色々な動きがあったが、とにもかくにも“テラヘルツ”という言葉が初期の頃より更に広く知れわたるようになり、確実に市民権を得るようになった。それどころかナノやバイオと共に、今の時代のキーワードにもなりつつある。筆者が所属する応用物理学会でも3～4日の全日のセッションと1シンポジウムが大体毎回組まれている。そして本フォーラム主催のものも含め、あちこちで講演会、講習会、シンポジウムも別途開かれており、そこに多数の参加者を見る。このように分野が活況を呈し、アカデミックな研究活動と共に応用に向けて汎用分析、薬物・危険物検査、医薬品検査その他、2005年の動向調査報告書のロードマップに描かれた装置が実現されつつあるが、現状を更に活性化するためにこれから先どのようにするのか。

- 1) 大学や公的研究機関の間では公的資金を導入して、新しい原理の発掘や新しい応用の可能性を更に追求すること。
- 2) 現在実現しているテラヘルツ技術を更にどのようにすれば（方式、価格、性能他）ユーザーの期待に答えられるかを、ユーザーと共に考えること。
- 3) ユーザー側は他の電磁波帯では出来なかった事も含め、フォーラムの技術相談窓口を使って積極的に問題提起を行うこと。
- 4) テラヘルツ波技術の特長や有用性等についての啓蒙を続ける事と、データベースを構築すること。

等を筆者なりに挙げてみたが、今後フォーラムの中で折々に議論を重ねて行くことが必要であろう。フォーラムの事業関係では最近「テラヘルツ技術総覧」が本フォーラム編として出版され、専門家にとっても専門外の方々にとっても、テラヘルツテクノロジーの現状を認識する上での共通の基盤ができたことは意義深い。編集に携わった方々と延べ90名の執筆者、発刊元のNGTコーポレーションに心からお礼を申し上げたい。

また企画では、毎年5月の総会時の特別講演、8月の分析展 JAIMA コンファレンス、日韓合同ワークショップ等、充実した催しが立案・実行され、総務担当のホームページ [www.terahertzjapan.com](http://www.terahertzjapan.com) も洗練されたものが出来ている。各委員長と関係者の日頃のご努力に心からのお礼を申しあげたい。

テラヘルツテクノロジーフォーラム会長 阪井 清美